



AGULI

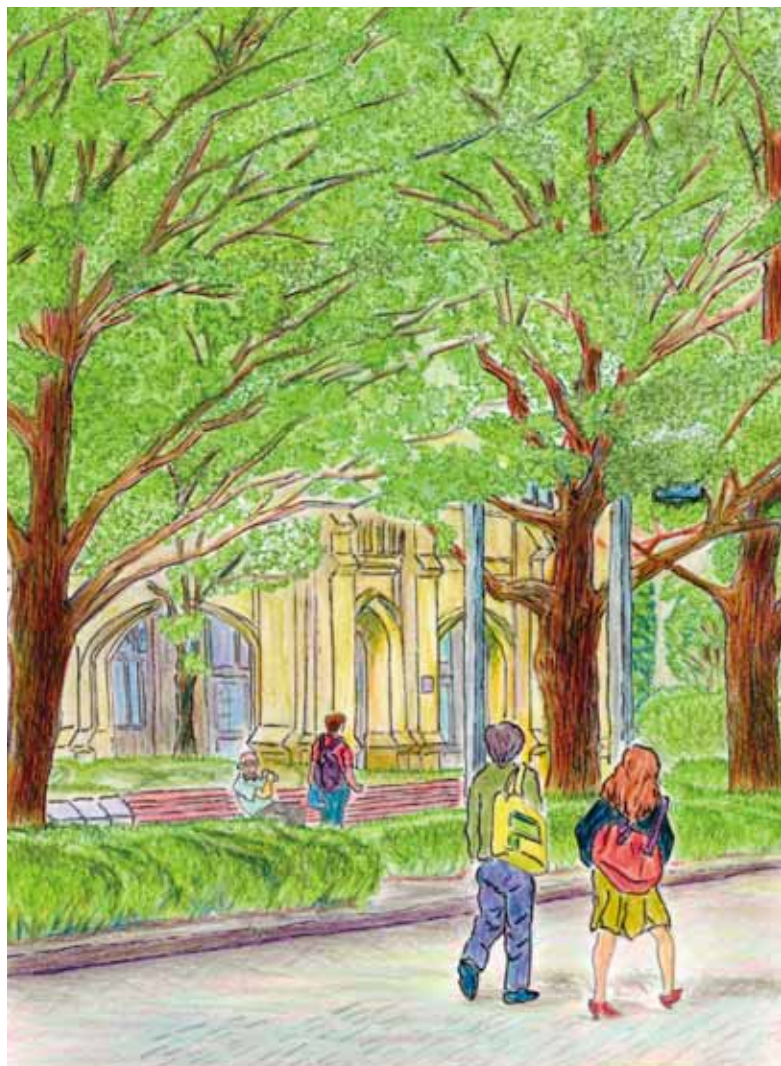
Aoyama Gakuin University Library Information

青山学院大学図書館報

特集 新入生を迎えて

No. 98

April 1, 2015



青山キャンパス

目次

巻頭エッセイ

私の研究事始め

—図書館とのかかわりで

……………梅津 順一 2～3

特集 新入生を迎えて

Ars longa, vita brevis

……………中川 辰洋 4

図書館を使い尽くそう

—まずは「探検」から

……………西澤 宗英 5

古本屋と通販サイト

……………狩野 良規 6

書棚徘徊

……………高木光太郎 7

書評を書いてみませんか

……………黒岩健一郎 8

新聞データベースの活用について

……………山口 直也 9

2014年度 図書館のイベント報告

……………10～11

図書館広報板……………12



❖ 私の研究事始め ―― 図書館とのかかわりで

院長 梅津 順一

UMETSU Junichi

昨年7月に青山学院院長に就任した際、「院長になった以上、研究はできませんよ。」との忠告があった。研究ができないとは、研究論文が書けなくなることかと肯いた。しかし、現実には研究書は読めない、雑誌も読めない、図書館にも行けない。図書館に疎遠になって、図書館報への寄稿を求められた。


仕方なく、私の研究事始めのころの図書館とのかかわりを書くことにしよう。私は1970年代はじめ、大学紛争の余蘆くすぶる時期に大学院生活をはじめた。経済学研究科で西洋経済史専攻だが、テーマはマックス・ヴェーバーの古典『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』とのかかわりで、宗教的資料にもとづくヴェーバー批判が多いのでその点を検証してみたいということであった。論争的問題であって論文が書きやすそうとの安易な判断もあった。

ヴェーバーが使った重要な資料に、ピューリタン牧師リチャード・バクスター（1615-1691）の著作があった。この手の著作は、所属の東大の図書館では望み薄。調べてみたら、三鷹の東京神学大学図書館になんと1707年刊行の4巻本の著作集があった。後で聞い

たところでは、ニューヨークのユニオン神学校で博士号を取得された同大学のO教授の縁で、同神学校から寄贈されたものであった。しかし、読みにくい活字、読みなれない英文では歯が立たない。その著作集が使えるようになったのはかなり後のことであった。

そのころ関西学院大学図書館に19世紀半ばに刊行された23巻本のバクスター全集があることを知り、関学を訪ねたことがあった。経済史で同門のA教授を頼りに、寛容な教授の研究室を一日占拠して、全巻目次をコピーさせていただいた。目次をコピーしたのは、その後にコピーを依頼しやすくするため。だがその書物は、当時話題となり始めていた酸性紙で、保存状態は悪く、下手に扱うとボロボロになる危険があった。後で調べたところ、その23巻本著作集の内容は、上記の4巻本と同じであることに気が付いた。

大学院の修士課程二年のとき、確か田中角栄首相主導による「国際交流基金」留学生としてイギリスに留学することができた。バクスターのみならず、バクスター周辺の基本著作に自由に接する機会に恵まれたわけである。とくにひと夏、大英博物館に隣接する大



英図書館にこもって次々と17世紀の文献を多数紐解くことができたのは、大変幸運なことであった。

その大英図書館の近くに、ウィリアムズ博士図書館があった。ウィリアムズ博士はバクスターとも親交があった非国教徒の牧師で、この図書館は、非国教徒関係の資料で著名である。その閲覧室には穏やかな表情のバクスターの肖像画もあった。ある日、ウスターシャーにあるバクスターゆかりの教会を訪ねたら、司祭が黒人であったのには驚いたし、その町の図書館で当時の社会構造に関する論文を見つけたのは収穫であった。

このようにバクスターとその周辺の資料には近づけたが、それをどう読み込むか。そのためには研究史の流れを知って、自分の研究視角を定めなければならない。主題の性格上、日本人の研究論文は乏しい。とすれば、欧文の研究状況を知らなければならない。そのため手掛かりとなったのは、S. N. Eisenstadt 編集の *The Protestant Ethic and Modernization : a Comparative View* など、何冊かの研究案内的書物だが、そこで取り上げられている基本的な研究文献に接することに苦労した。日本国内で所蔵する図書館を探して、さらに図書館間の貸借ネットワークを利用しなければならなかった。さらには研究雑誌の所在を確かめ、

研究論文を読むこと。コピー代金も最近ほど安くはなかった。

しかし、これは昔話。現在、研究者を取り巻く環境は一変した。数年前、グーグル・ブックスを試していたら、なんとあのバクスター著作集がネット経由で簡単に読めることに気が付いた。研究書だって、CiNiiBooksを使えば瞬時に所在を確かめることができる。なかなか入手困難であった一時代前の重要な研究書も、アマゾンの中古市場で安価に手に入ることも多い。研究論文に至っては、最新の必要な文献は、ネット上で読むことができる。手書きの文書でもないかぎり、今では居ながらにして大抵の文書は入手できる。

その結果、図書館に通う必要は激減。図書館は情報検索への中継基地のようになってしまった。情報ハイウェイという言葉があるが、近ごろの研究者はハイウェイを疾走して、目的に合わせて情報収集に一目散。実に効率的に研究できるようになった。高速で疾走する研究者は、余計なところにも、身近なところにも目がいかず、孤立していることはないか。人間は本来歩きながら考えるもの、他者と語り合いながら考えるもの。図書館には、談話の場となり知の共同体を作り上げる役割もあるのではないか。

(総合文化政策学部教授 経済思想史)

Ars longa, vita brevis

中川辰洋

NAKAGAWA Tatsuhiko

標題は「芸術〔または学芸〕は久しく、人の生命は儂い」ほどの意味である。医聖ヒポクラテスの警句で、ローマ後期の哲学者・詩人セネカが『生の短さについて』のなかでラテン語に翻訳したと伝えられる。ars（複数形 artes）は現代の arte/artのご先祖様。“Ars longa”の謂は、arsに classicus というラテン語をかぶせれば、現代人の感覚に訴えかけるはずである。

classicus のもとの語意は様々の分野で功績のある者を讃え敬意を表して贈られる千年の都ローマの名誉市民を意味する称号である。これが現代語の classicus、古典の意に転じた。図書館とは古今東西万卷の書を蔵する宮殿、芸術、学問などの分野の名誉市民たちの作品、^{クラシッコ}古典との出会いの場でもある。

古典の世界とは実に多様である。医師の倫理を説く「ヒポクラテスの誓い」は医師ならずとも知らぬ者のない古典である。アリストテレスの^{オルガノン}論理体系の向こうを張るベーコンの『^{ノウム・オルガスム}新論理学』、デカルトの『方法序説』が古典たるをよしとするも、近代日本の、例えば漱石の『吾輩は猫である』や鴎外の『舞姫』はおろか、谷崎の『春琴抄』、荷風の『ふらんす物語』ですら古典という向きもある。

たしかに彼等の同時代人と同様に現代人をも魅了する。人間と生命との関わりを考える根源的な問いを発しているからであろう。上目線で説教を垂れる風ではなく、われわれ一般市民とじかに向き合って語りかけてくる。ちなみに筆者の^{なりわい}生業に即していえば、“資本”や“資本家”の用語の生みの親テュルゴアの『富の形成と分配に関する諸省察』、スミスの『国富論』などの著作が現代社会の諸問題を考えるうえで時にヒントをあたえてくれる。幾星霜を経ても^{すた}廃れない。いずれ劣らぬ名誉市民の手に成る作品、すなわち古典のゆえんである。

往年のシャンソン歌手シャルル・トレネは「詩人の魂」のなかで歌っている。

Longtemps, longtemps, longtemps/ Après que les poètes ont disparu/ Leurs chansons courent encore dans les rues (詩人たちが^{いな}亡くなって／長い長い月日が経っても／人びとの行き交う道みちに彼等の^{うた}詩が跡途絶えることはない)

(経済学部教授 EU 経済論)

図書館を使い尽くそう—まずは「探検」から

西澤 宗英

NISHIZAWA Munehide

新入生の皆さん、入学おめでとうございます。

今、皆さんは、「いよいよ大学に入った。さあ、これから本格的に勉強しよう」という気持を持っていることでしょう（そういう気持を持ってほしい）。そういう人達に、ぜひ「図書館を使い尽くそう」というメッセージを送ります。

高等学校の図書館と大学の図書館は、全く別の施設と覚えてもらった方がいいです。

私の大学時代、図書館は、受験勉強をする場所でした。朝9時の開館と同時に閲覧室に飛び込み（毎日必ず同じ席。顔が知られていたのも、たまに遅れて行っても、ちゃんと席は空いていました）、夜8時45分に閉館の鐘が鳴るまで席にいました。講義があるときは、そこからノートと六法だけをもって教室に行きます。昼ご飯と夕ご飯は、館内のあちこちに陣取っている同級生と連れだって出かけました。書庫に行くことはほとんどありませんでした。

しかし、こんな使い方では勿体ないです。大学の図書館は、何ととっても「蔵書」を使うべきです。それも、自分の専門以外の。たとえば、気分転換を兼ねて、館内（書架）を歩き回ってみませんか。目的の資料を求めて特定の場所に行くだけでなく、隅から隅まで、「どんな本が所蔵されているんだろうか？」という「探検」です。

私はパリに在外研究に行ったとき、法学部の図書館で何度か「探検」をしました。この図書館は、蔵書番号が、どうやら「受入順」になっているようでした。パリ大学の大本は、13世紀にまで遡ります。たどり着いたのは、4番か5番の本でした。タブロイド新聞くらいの大きさで、頑丈で固い革表紙がついていました。ラテン語で書かれた何かの写本でした。

22年前、初めて本学に来たときも「探検」をしました。法律の本以外にどんなものがあるかという探検です。私は仏教に関心があるのですが、「宗教」のところには、『大正新脩大蔵経』（183/T3-1~98）という、すべての「お経」（仏画まであります）を網羅した全集がちゃんと収められていました（こういう本は、大学図書館にしかありません）。クラシックの「楽譜（スコア）」もありました。探検の「コツ」は、自分の専門や興味のある分野以外の場所に行くことです。とくに目的もなく歩き回っている間に、思い掛けない発見があるかも知れません。それが新しい一生の研究テーマなんかになったら、それこそ素晴らしいではないですか。

古本屋と通販サイト

狩野良規

KANO Yoshiki

本の探し方が、昔とひどく変わった。かつて古本屋巡りは、僕を未知の世界へ誘ってくれる「邂逅」の体験であった。

柴田翔の芥川賞受賞作品『されどわれらが日々——』（1964年）は、古本屋の店先から始まる。東大の大学院生である主人公が、題名すら知らない古ぼけた翻訳書の、名も知らぬ訳者の後書きを読んで、その「少し熱っぽい調子」に思いをめぐらす。それはその訳者の出した、一生でただ一冊の本かもしれない、そんな期待して出した本も、今はほとんど人に知られることなく場末の古本屋の均一本の中につっこまれている。だが、「俺だって、あと半年もすれば、地方の大学の語学教師になり、やがて一冊位訳書も出すだろう」と。

僕の高校時代の愛読書である。主人公が古本屋で買ったH全集の持ち主探しを縦糸に、エリートたちの生硬で、物憂く、空洞のような心情を描いた青春小説。柴田28歳、本郷の独文を修了した研究者が書いた作品だから、登場人物たちのメンタリティには、作者のその照り返しが多分に窺える。インテリって嫌だな、東大生って暗いな！ そう思った記憶が今でも鮮やかに残っている。

その後、僕は受験に失敗し、御茶ノ水の予備校に1年間通った。授業はほぼ午前中で終わり。浪人の身で小遣いは乏しく、午後は神田の古本屋で時間を潰すことが多かった。大学に入学した時には、神保町のどこの古本屋のどの棚に行けば、どういう本があるか、だいたい察しがついた。これは、本を買うといえればほとんどが古本という人間にとって、「一生の礎」となる経験であった。

けれども最近は、学生たちどころか、自分自身も以前ほど古本屋をまわらなくなかった。欲しい本は、インターネットの通販のサイトで簡単に見つかる。しかも、家まで届けてくれる。便利な時代になった。だが、何年も古本屋を歩きまわり、やっと探していた本に巡り会えた時の、あの嬉しさはそこにはない。

いつぞや、通販のサイトに、僕が40歳の時に初めて出版した批評書——僕も少し熱っぽい後書きを書いた——が1円で並んでいた。失礼だよねえ、人が苦労して書いた本を1円だなんて！ 癪にさわったので、10数冊全部買い占めたら、1冊ずつちゃんと送料がかかって、合計数千円になった。なるほど、そういう商売か。で、1円本には、大学や地方図書館の蔵書印が押されている。訳ありの本の出所は、リサイクル本だったわけだ。

と、なんかかや言って、この前は、柴田翔の『ファウスト』の批評書を通販で格安の値段で手に入れ、重宝に使わせてもらった。楽ちん、楽ちん。けどどなあ、便利が、足を棒のようにして探した末のあの邂逅の欲びもまた消してしまった。よい時代になったのかどうか。実に微妙なところである。

書棚徘徊

高木 光太郎

TAKAGI Kotaro

図書館や大きな書店の、本がぎっしりと並べられた書棚。その間をうろうろして、気になる本があれば、少し眺めて、また歩き回る。こういう時間の使い方をするようになったのは、大学に入学して少したった頃だったと思う。都心からだいぶ離れたところに広大なキャンパスをもつ私立大学で心理学を専攻することになった私は、大学図書館、心理学専攻の資料室、新宿や東京駅近くの大書店、そして神保町の古書店街などに頻繁に通うようになっていた。

この書棚徘徊癖のおかげで、大学1年生の終わり頃には、ずいぶん多くの本に出会っていたように思う。よく読んでいたのは心理学や当時流行っていた現代思想関連の本だった。ただ、こうして出会った本たちが、そのあとの勉強や卒論に直接役だったかといえば、そうでもない。なにしろ高校を出たばかりの小僧である。たとえばフロイトの「精神分析入門」など読んでみても、その難解極まる（ぜんぜん入門じゃない）議論についていけるわけがない。ただ、そういう「学問っぽい本」を持っていることや、難しげな専門用語に触れること自体が妙に愉快だった。大学1年生にしてすでに学問の魅力を発見したのか、といえばそうでもない。むしろ「友達や親はもちろん、高校の先生ですら知らないであろう難しいことを俺は知ってるぜ（本当はよくわかんないが）、とにかく凄いぜ」といった感じの、膨張した自意識がもたらす屈折した快樂である。要は「中二病」だ。

だが、大学1年生の頃のこうした中二病的書棚徘徊が、まったく無意味だったかと言えば、そうとも言えない。「世の中には難しいことを、やたらにまじめに考えて、それをなんとか伝えようとしている人が沢山いる」ということを知ったからだ。図書館や書店の書棚というのは、そういう変わり者たちの叫び声、つぶやき、うめき声が封じ込められている場所である。本の内容を理解することではなく、こうした声の存在と響きを感知すること。それが学問の、ほんとうの最初の一步であるように私には思える。変わり者の声は、データベースやネット書店でキーワード検索をしても、何故かなかなか聞こえてこない。私が書棚徘徊を新入生に勧める所以である。

書評を書いてみませんか

黒岩 健一郎

KUROIWA Kenichiro

この図書館報を手に行っている人は、おそらく本に興味を持っている人に違いない。みなさんは、これからの4年間で、かなりの冊数を読むことになるだろう。そこで提案。

「書評を書いてみませんか」

書評と言うと難しく聞こえるかもしれないが、そう堅く考える必要はない。読書感想メモ、もしくは読書日記と思えばよい。長くなくても構わない。具体的には、次のようなことを記せばよい。①テーマ（何について書かれているか）、②時代背景（なぜ今このテーマが重要なのか）、③目的・意図（なぜ書かれたのか）、④内容、主張、メッセージ（何を言いたいのか）、⑤特徴（類似書との違いは何か）、⑥長所（どのような貢献があるか）、⑦短所（欠点は何か）、⑧所感（何を思ったか）、⑨対象読者・アドバイス（誰に読んでもらいたいか、どのように読むと効果的か）。この9項目すべてを網羅する必要はないし、この他に自分で項目を加えてもよい。

書評を書くことには、いくつかのメリットがある。第一に、書評を書くためには、本をしっかりと読まなくてはならないので、内容の理解が深まる。第二に、文章にまとめる作業をすることで、本の内容が記憶に残りやすい。読んだのに、何を書いてあったか忘れてしまった本は多いのではないだろうか。第三に、後日、本の内容を思い出すときに、書評があると思い出しやすい。第四に、書評の数を増やしたいと思うようになるので、読む本の量が増えることである。

書評は、それ用のノートを用意することでもよいし、手帳や日記に記してもよい。また、ブログやSNSを利用してもよい。アマゾンなどのオンライン書店には、書評を書くスペースがあるので、それを利用する方法もある。Web上で書評を書くと、他者が読んでフィードバックをくれるので、励みになるだろう。

自分の書いた書評を、あとで振り返ってみると、それぞれの時期にどんなことに興味を持っていたのかを思い出すことができる。その本を読んだ背景にあった出来事（恋愛？ 旅行？ ゼミの課題？）も同時に思い出すので面白い。卒業する頃には、学生時代を振り返るアルバムのような存在になっているだろう。

さあ、記念すべき1冊目はどの本にする？

新聞データベースの活用について

山口 直也

YAMAGUCHI Naoya

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。講義・演習、部活動・サークル活動、インターンシップ・海外留学等を通じて、豊かな教養と専門能力を身に付けるとともに、友人・教職員をはじめ多くの人々との関わりを通じて、豊かな人間性や社会性を身に付けていただきたいと思います。

大学生活をはじめのみなさんに、新聞を読む習慣と新聞データベースの活用についてお勧めします。普段から新聞を読んでいる方もいるかと思いますが、これまで新聞を読む習慣がなかった方には、是非、新聞を読む習慣を身に付けてほしいと思います。

現在は、インターネットを通じて必要な情報を容易に入手できるため、必要な情報はネットで検索して調べるし、購読料もばかにならないから、わざわざ新聞を買って読まないと思っている方も少なくないかと思いますが、ネットでの情報収集は、往々にしてご自身の興味ある分野に限定されるため、知識の裾野が広がりません。

これに対し、新聞は、毎日一通り目を通すことで、広い分野の最新の情報を得ることができます。これまで知らなかった知識を得ることができ、新たな興味・関心領域を広げるきっかけとなります。特に社会科学分野では、現代社会で起こっている事象を考察・分析する専門領域が多いので、学習内容を理解する上でも、日頃から新聞を読むことは大きな助けになります。

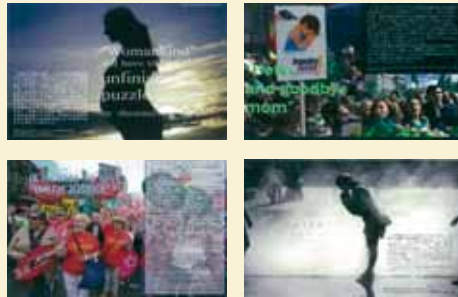
毎日、新聞を読むことで最新の情報に触れることができますが、過去の事象について、どのような出来事が起こったのか、その背景は何なのかといったことを調べる上で、新聞データベースがとても役に立ちます。

本学の図書館ホームページから、学生・教職員の方々が利用できる豊富なデータベースにアクセスすることができますが、その中に、新聞データベースがあります。これは、朝日新聞、日本経済新聞、毎日新聞、読売新聞といった各新聞社が、発行した新聞をデータベース化してネットで読むことができるようにしたものです。私は専門分野の関係から、日経テレコン21という日本経済新聞のデータベースをよく利用します。

皆さんには、新聞を読むことと、新聞データベースを活用することを通じて、様々な分野への知的好奇心を醸成してほしいと願っています。

2014年度 図書館のイベント報告

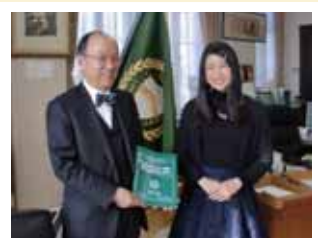
第3回「情報の探索と表現」コンテスト



最優秀賞作品



安藤理事長と高見勇樹さん



梅津院長と菊池梨乃さん



今年で3回目となり、図書館で利用できるオンラインデータベース(AFP World Academic Archive、朝日新聞『聞蔵IIビジュアル』、ジャパンレレッジ Lib、日経BP記事検索サービス)を利用し、オリジナルの記事を作成するコンテスト。今回は創立140周年記念行事ともタイアップし、賞も充実しました。過去最多の53作品もの応募があり、最優秀賞作品は、グループ部門(2名以上で1作品(4ページ)作成)から初めて選ばれました。

ビブリオバトル in 万代記念図書館



中島はる名さん



井生英恵さん

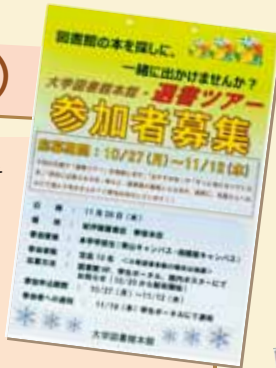


「ビブリオバトル」とは、発表者がお勧めの本を5分間で紹介し、それを聞いた参加者が一番読みたいと思った本に投票して『チャンプ本』を決める知的書評合戦です。相模原祭期間に開催され、参加者は9名、2回のビブリオバトルを実施しました。チャンプ本2冊は関東地区決戦に進み、さらにそのうちの1冊『帰ってきたヒトラー』は「全国大学ビブリオバトル2014～京都決戦～」の本戦に出場しました。

選書ツアー（本館）

図書館の蔵書にしたい本を実際に手にして選書ができるこの企画。

「選書ツアー」では紀伊國屋書店新宿本店へ実際に足を運び、書店員の方から講義を受け、6名の学生自身が選んだ図書のポップを作成しました。本とポップは本館内と紀伊國屋書店新宿本店に展示されました。



選書 Weeks （万代記念図書館）

「選書 Weeks」では万代記念図書館 1 階に本を展示して学生に選書してもらいました。

延べ40名の学生が参加し、100冊ほどの本が選ばれ図書館に所蔵されました。

※「選書」とは図書館に所蔵しておく資料を選定すること



学生Book DE Talking



山手線沿線私立大学図書館コンソーシアム主催の企画。今回は本学青山キャンパスの図書館学習室を会場に8大学から約40名が集まりました。4～5人で1グループを作り、各大学の学生が自身のオススメする本を持ち寄り、紹介し合いました。紹介した本の話から学生生活までざっくばらんに様々な話題が飛び交い、他大学生との交流が深まりました。

4月の図書館オリエンテーションのご案内

本館 青山キャンパス

図書館は、授業やレポート作成で必要になる資料がたくさんあり、皆さんの学習・研究をサポートしています。大学の図書館を使いこなすと、学習や研究がスムーズに進み、将来にも役立ちます。このオリエンテーションでは、青山本館に即した利用方法、資料の探し方についてご案内します。図書館の見学もできます。学習や学生生活に活かしていきましょう!

**【新入生対象】
図書館利用オリエンテーション**

- 日程：4/2 (木) ~ 4/6 (月) ※日曜を除く
- 時間：全回同内容
 - ① 10:10~10:45 ⑤ 14:10~14:45
 - ② 11:10~11:45 ⑥ 15:10~15:45
 - ③ 12:10~12:45 ⑦ 16:10~16:45
 - ④ 13:10~13:45 ※4/4(土)は②~⑥のみ実施
- 集合場所：8号館 1階図書館学習室

気軽に参加できます。

図書館をうまく使って、素晴らしいスタートを!

**【全学年対象】
図書館利用オリエンテーション**

- 日程：4/7 (火) ~ 4/13 (月) ※日曜を除く
- 時間：全回同内容
 - ① 12:40~13:10 ② 15:10~15:40
- 集合場所：本館地下 PC コーナー

大学での学習・研究に不可欠な図書館 HP・OPAC を中心とした、新入生対象のオリエンテーションより詳しい内容です。今さら聞けない、間に合わない...となる前に、今のうちに!

● OPAC コンシェルジュ

日程：4/2 (木) ~ 4/11 (土) ※日曜を除く
時間：12:30~(4/2~4/6のみ)、17:30~
場所：本館 1階 OPAC 前
図書館資料の探し方をご案内します。

● 「My パソコンで図書館利用」

日程：4/4 (土) 13:30~14:30
場所：本館 1階マルチメディア室
ふだんお使いの My パソコンを持参してください。

● 「大学院生のための図書館案内」

4/4 (土) 12:30~13:20 場所：本館 1階マルチメディア室

● 「スタートダッシュ・ガイダンス~専門データベースをマスターしよう~」

時間：18:00~20:00 ※Refworksのみ 16:30~17:55に実施
場所：本館 1階マルチメディア室

4/6 (月) 経済・経営・会計編 Needs-FQ 4/9 (木) 英米文学編 OED online ほか
4/7 (火) 法学編 LexisNexis 4/10 (金) 海外文献応用・文献管理編
4/8 (水) 文献管理編 Refworks[®] Web of Science, EndNote Web
海外文献編① ProQuest 4/14 (火) 海外文献編② EBSCOhost

万代記念図書館 相模原キャンパス

For Freshman 初心者マークの
図書館利用オリエンテーション



図書館内を歩きながら、本の貸出・返却などの基本的な利用方法や、本や雑誌の検索方法、書架での探し方を説明します。試験直前に慌てる前に、高校までとは違う大学図書館の利用方法をマスターしてください。コンピュータで制御された図書館地下自動書庫内の本の利用方法についても説明します。

日時	時間	学部・学科
4月3日(金)	12:30~13:20	電気電子、機械創造、経営システム
	14:00~14:50	物理・数理、化学・生命、情報テクノロジー
4月4日(土)	11:30~12:20	社会情報
4月6日(月)	10:00~10:50	理工全学科、社会情報、地球社会共生
	11:30~12:20	地球社会共生
	14:30~15:20	理工全学科、社会情報、地球社会共生

- 所要時間：50分
- 集合場所：B棟 1階 図書館内中央吹き抜け下

★上記日程で参加できなかった方は、下記の日時にご参加ください。

4月7日(火)~10日(金) 11:00~11:50 13:30~14:20 15:00~15:50

編集後記

新入生のみなさんは、今回の特集から「大学らしさ」を感じたのではと思います。範囲あり、決まりあり、受動的、効率重視、といった勉強から離れ、古い物から最新の物まで、自分の感覚で選び、自分の基準で評価しながら、自分の時間配分で、本や情報に接しましょう。枠組みのなさにはストレスにもなるとは思いますが、今までとは違う学びを楽しんでください。(繁樹江里)

青山学院スクール・モットー 地の塩、世の光 The Salt of the Earth, The Light of the World

青山学院大学図書館報「AGULI」第98号 2015年4月1日発行

編集 青山学院大学図書館報編集委員会・大学図書館広報担当 TEL.03-3499-1402 FAX.03-3407-4472

発行 青山学院大学図書館 〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25 http://www.agulin.aoyama.ac.jp/